

夏みかん

壺井 栄

学校から帰り道、いつもならばお友達と一緒におしゃべりなどしながら、ゆっくり歩くのですが、今日の朝子は早くおうちへ帰りたくてそれどころではありませんでした。学校の門を出るなり仲よしの道子にまで、こう言いました。

「私、今日はとっても忙しいのだから先に帰るわね。」

そして道子の返事も聞かないで、とっとと駆けだしました。手提げの中の筆箱が、駆け足に調子を合わせてことと音をたてます。お寺の脇を通って、みかん畑の下の細道を駆けぬけて、小川の橋の近くまで来たとき、朝子は後ろにやはり自分と同じように走ってくる足音が聞こえると思ったとたん、

「待って。」

と呼びかけられました。弟の一夫です。それを聞くと、朝子はますます力を入れて駆けだしました。けれど、すばしっこい一夫にかかないことがないことに気がつくくと、橋を駆けぬけたところで急に足を緩め、畑の石垣に片手を寄せて、後ろ向きのまま肩で息をしました。すぐに追いついた一夫も同じように石垣に片手をかけハアハアと口を開けて、早い呼吸をしました。顔を見合わせたまま二人はしばらくの間、なんにも言えませんでした。しかし、二人とも言いようのない喜び

がその体中にあふれているようです。二人の姿を見て、畑の隅の豚小屋の中から、二匹の豚が首をのぞかせ、しきりにぶう、ぶうと呼びかけています。食べ物でもくれるかと豚は思っているのですが、今日の二人には豚にも構ってられないほどの大事件が、心をわくわくさせていたので、豚の呼び声も耳に入らず、菜種の花の美しさにも目が届かない様子でした。

「ねえちゃん、わかった、あれ。」

一夫が聞くと、朝子は首を横に振り、

「ううん、まだわかんない、だってエビスヤにはあめやチョコレートや、子供のおもちゃしか売っていないわよ。大人のものなんか一つもありゃしない。」

「そうさ、だからぼく、町まで買いに行こうかと思うんだけど。」

「だからおかあさんにそう言って、バスに乗っていいこうよ。」

「バス代が十円かかるわ、そしたら、十円引いたらもう二十五円しか残らないわ。それで何か買える。」

「買えるさ、だからバスに乗っていいこうよ。」

「でもさ、おかあさんに言わないで、急に喜ばしてあげたいの、私は。」

「それもそうだね。ぼくたちからお見舞いをあげますって言ったら、おかあさん、びっくりするぞ。」

大事件というのは朝子と一夫と二人きりの考えで、病気で休んでいたおかあさんにお見舞いをあげようというのでした。しかもその病気というのが、おかあさんのおなかに赤ちゃんが生まれかけているためだとわかって、みんなで喜んだのは昨日のことです。めったに病気などしたことのないおかあさんが、急にご飯が食べられなくなり、痩せてしまわれたので、朝子も一夫も昨日

まではずいぶん心配していたのです。

麦畑の中の細い道を二人は後先になって歩いていました。もう走ったあとの胸のどきどきはずっと静まっていた。一夫が後ろの朝子を振り返って、「ねえちゃん、男の子と女の子とどっちが生まれると思う。」と、にこにこ顔で聞きました。

「そんなことわかんないさ、でも女の子だと思おうわ。」

「ふうん、ぼくは男の子だ、絶対。」

一夫が力みかえった声で言いました。朝子は姉さんらしく笑って、「だってさ、生まれてみなくちゃわからないじゃないの。」

「でもさ、ぼくは男の子を生んでもらうためにお見舞いをあげるんだよ。」

「じゃあ朝子は、女の子のためにお見舞いをあげるわ。女の子らしいものをあげるわ。」

「ぼくだって男の子らしいものをあげるよ。ええと、ええと……」

一夫はしきりに首をひねったあと、

「けん玉。」

と大声で言いました。

「じゃ私はお手玉。」

しかし言ったあとで、二人はおかしくなってケラケラ声をあげて笑いました。けん玉やお手玉をもらうのは自分たちではなく、おかあさんなのだと思ったからです。おかあさんの喜ぶものは何だろう。自分たちの使わずにもっているおこづかい二人分合わせて三十五円で買えるもの。昨日から二人はそのことばかり考えていました。

「ね、なにかいい考えないの。」
一夫が尋ねますと、朝子は、あっと急にいい考えが浮かんだような顔つきをして、「いいこと言ったげる。」

と内緒声で一夫の方へ寄っていきながら、ひょいと一足だけ一夫の先になり、そしてさも大事件そうに一夫の耳に口を寄せました。一生懸命の一夫の耳に、思いがけない言葉が注ぎ込まれました。

「イイコト コトコト コンペイト ナカワツタラ ウドンノコ。」

そして、わあっと言いながら駆けだしました。一夫もなにくそと追いかけてました。もう家が目の前のところだったので、二人は土間の入口で一緒になり、もつれあって家の中にとび込みました。ただいまとも言わずにドタバタつかみ合っている二人を珍しく起きていたおかあさんが笑って見ていました。つかみ合いながら一夫からそのわけを聞いたおかあさんも、どっちに肩をもつこともできず笑うよりほかなかったのでしょう。イイコト コトコトは、しょっちゅう二人がかつぎ合っている言葉だったからです。やっと収まった二人に、おかあさんは言いました。

「ね、お風呂に入りたいのだけれど、二人でお水を入れてくれない。お風呂に入って、夏みかんでも食べたなら、おかあさんはもうもとの元気になりそうよ。でも、もう夏みかんはどこにもあるまいし、あっても高く買って買えないでしょう。せめてお風呂に入りたいの、水を入れてくれたら、焚くのはおかあさんがするからね。」

それを聞くと、二人はすぐ裸足になって水くみを始めました。風呂場と井戸端をバケツ・リレーをやりながら、誰にも悟られぬように、二人はちらり、ちらりとささやきました。耳に口など寄せずに、そしらぬ顔のまま、

「今度はほんとにいいこと。」

朝子が言うと、一夫が、

「ウドンコだったらひどいぞ。」

するとその次に朝子が、

「ナツミカン！」

今度は一夫で、

「サンセイ。」

水を入れてしまうと、二人はそおうと家を出ました。この辺は夏みかんとれる土地だけれど、もうみかんも花の季節になってるので、どこにも売っていませんでした。しかし、みかん畑をたくさんもっている五郎さんの家にだけは、毎年囲いの夏みかんがあつて高い値段で売っているのを、二人は知っていました。五郎さんのうちはお寺の上にありました。大きな門の脇のくぐり戸を入っていくと、五郎さんのおばさんが、土蔵の中から出てくるところでした。土蔵の石段の上にいるおばさんに、

「おばさん、夏みかんある。」

一夫が尋ねると、おばさんは少しばかり用心深そうな目をして、

「どうしたの。」

と聞きました。朝子が、

「うちのおかあさんが病気で、それで欲しいの。一つだけ分けてください。」

おばさんは機嫌のいい顔になり、

「一つと言わずに、二つでも三つでも。」

と言いました。二人は顔を見合わせてしばらく黙っていました。やがて朝子は決心して、

「おばさん、三十五円ほどのを一つちょうだい。三十五円持ってきたの。」

「ああ、そうかい、よしよし。」

おばさんは土蔵の中から大きな夏みかんを持ってきて差し出しながら、

「はい、とびきり上等のをあげましょう。それからこれはおまけだよ。」

そう言って小さいのを一つ添えてくれました。

それをいち早く受け取った一夫は、両手で胸に抱えて五郎さんの家の門を出るなり駆けだしました。そのあとを朝子も走りました。家に近づくと、風呂場の煙突からもう煙が出ていました。

〈出典 『壺井栄童話集』（新潮社、一九五八年）〉

【著者】壺井栄（つぼい さかえ）

一八九九（明治三二）年—一九六七（昭和四二）年
小説家。香川県の生まれ。

【著書】『二十四の瞳』『大根の葉』『柿の木のあゝ家』など